

私たちにできることを

木森 隆

3月11日、東日本にM9の巨大地震が発生し、大津波が東北地方の太平洋岸を中心に襲い、多くの方たちの尊い命や財産を奪いました。翌12日には福島第一原子力発電所の爆発事故が起こり、放射能汚染（被爆）の脅威も生まれています。余震も続くなか、東京や千葉で生活する私たちも、公共交通機関の運休やまひ、ガソリンや食料の不足、計画停電といった生活の変化を強いられています。必死の思いで被災地の親族や友人の安否確認や呼び寄せをなさったり、寄付やボランティアを申し出たり、すでにされている方々も多いことでしょう。

ことばを失うようなこの惨状を前に、いくつかのことを確認していきましょう。

1. 神は単純な因果応報を戒める 時に私たちは苦難の原因をさがします。原因をはっきりさせ責任者が追求されるべき事柄もありますが、そうでない場合も多いのです。そのときにする安易な理由づけが、苦しみのなかにある方をさらに苦しめることがあります。ヨブの友人がヨブにたいしてしてしまったこと、逆に主が生まれつきの盲人にたいして何と適切であったか（ヨハネ9:3）を思い出しましょう。

2. 人は神に聴き続ける 一方で神の意図がわからないからと不可知論者になり、さらに虚無主義（ニヒリズム）に陥ってはなりません。虚無主義は、すべてを治める神を否定するにとどまらず、結局は弱肉強食の世界を促進するからです。天災の場合は、神様の真意が見えないことがしばしばです。主にお目にかかるときまでわからないとしても、神に問い、聴こうとしてよいのです。「主よ、なぜですか」と訊くことはむしろ健全です。

3. 聴きながら 世界的な大惨事であった2004年のスマトラ沖地震が起こったとき、アメリカの教会では「そのとき神はどこにおられたのか」という議論がなされたそうです。問いの正しい答はおそらく「神は犠牲者たちと共におられた」です。十字架で不当な苦難と死を経験されたキリストが神なのです。キリストは、困窮のなかにある「最も小さい者たちのひとりにしたことはわたしにしたことである」（マタイ 25:40）とも言われました。苦境のなかにいる人たちへの奉仕は、キリストへの奉仕です。

4. 三つの視野で 今回、揺れと津波による被害が多く死者・行方不明者をもたらし、原発事故を招来し、生存者の生活再建も息の長い戦いとなりそうです。交通網の回復も課題で、そうしたなか三つの視野で行動を考える必要があります。第一は、余震が続く私たちの周辺の警戒と節電です。第二は、WVJのリーダーとして片山兄が現地入りしていますが、深刻な被災地に赴く働きのために祈り、支援することです。4月になったらかなりの場所まで私たちもボランティアで入れるようになるかもしれません。第三は、今回の被災で多くの方たちが住まいをあきらめざるを得なくて、別の地域に一時退避あるいは移住しようとしています。原発事故で退避を余儀なくされた方々は何万人もいるでしょう。広範囲にわたって物心のケア、福音のあかしが必要とされます。なくなった方々を心から悼み、被災地の苦しみを覚え続け、私たちの手を主と人々に差しのばしていきましょう。